

昭和51年5月9日第三種郵便物認可 昭和55年11月1日発行（毎月一回発行） ISSN 0385-5457

ヒマラヤ No.108

●特集 カラコルムビッグクライミング



1980 NOV.

日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN——HAJ

1981年ヒマラヤ登山学校隊員募集

——ナンダ・カート (6611m) —— 許可取得!!

H A Jでは1人でも多くの意欲ある登山者にヒマラヤ遠征の機会をと、1977年以来四度にわたって延べ90名近い会員をヒマラヤ登山学校隊として派遣してきました。このヒマラヤ登山学校は確かな技術と経験を有する指導者(インストラクター)の統活のもとに、安全確実を第一にできるだけ多くの隊員が頂上に立つことを目標として実施するものです。

国内における企画・研究・準備実務からはじまり、登山現場での高所登山技術の修得、帰国後の総括・報告までの遠征のすべての過程に隊員が参画して行なうことをモットーにしており、単なるバック登山とは全く異なります。

81年度は、ガルワールヒマラヤの名峰ナンダ・カート(6,611m)にて実施する予定であります。ふるって御参加下さい。

実施要項

- 目 的 ①ナンダ・カート(6,611m)登頂
②ヒマラヤ登山の基礎修得
- 時 期 1981年9月13日～10月12日
29日間(BC以上の登山期間15日)
- 負担金 69万円
- 定 員 20名(申込順)
インストラクター4名(ドクター含む)
- 申込み 1980年12月末までに下記宛申込みこと(資料を送ります)
- 〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506 日本ヒマラヤ協会

この登山隊の旅行手続は、株式会社西遊旅行が担当します。旅行業代理店業1976号

表紙の言葉

杉本忠男

久し振りの晴天がおとずれ、我々はいよいよアタックに出かけた。ガスが切れると、逆光を浴びて黄金色に輝くアッパー・ヤズギルの大雪原……、その上にどっしりとかまえたユクシン・ガルデン・サル(7530m)も姿を現わした。

ヒマラヤ No.108

- | | | |
|-----|---------------------------------|--------------------------------|
| 1. | ヒマラヤ放談 | 小野木 三 郎 |
| 4. | ヒマラヤニュース<地域・トピックス・インフォメーション・新刊> | |
| 8. | 特 集 | カラコルムビッグクライミング |
| 16. | 連 載 | 遠 征 学 入 門⑧——清水 澄 |
| 18. | | ヒマラヤ閑話③花を求めて(4)——水 野 勉 |
| 20. | 連 載 | トレッキングで登れる山②<アイランドピーク> 岳 人・長 井 |

ヒマラヤ放談

近年ヒマラヤには多くの人々が訪れ、多くの話題を提供している。したがって、ヒマラヤへのアプローチは、単なる登山家のみのものではなくなっている。今月は趣向を変えて、御岳の植生をライフワークとし、広くアジアを歩き、ヒマラヤにも足跡を印した小野木三郎氏に御岳からヒマラヤまでの自然を中心に、自然の大切さをお伺いした。



岐阜県博物館主任学芸員
小野木 三郎

●植生調査は金と時間と根気

—— 御岳の植生に興味をお持ちのようですが。
小野木 御岳の岐阜県側、特に秋神川流域の植生に興味を持って調べていましたが、現在は、岐阜県の植物全体に広がっています。——御岳の長野県側は、木曽教育学会が、すでに「御岳の自然研究」という立派な本を、昭和37年頃に出していますね。

—— いつ頃から御岳に入られたのですか。

小野木 もととものきっかけは、卒業研究で入ったのです。昭和36年頃ですか。テーマは、一番北の尾根（継子尾根）地元では富士山に似ているから日和田富士ともいっていますが、その斜面に沿った植生の様子を調べる、これが中心でした。——金もかかるので大変でしたが、秋神温泉の主人の理解があったので調査が出来たようなものです。

—— どういう方法で調べるのですか、植生というのは。

小野木 植生というのは、植物の集団を一つの社会と見て、一定の面積で植物の勢力を調べるのです。大森林などで、例えば赤松林の場合ですと、1㎡では赤松がないかもしれませんね。そこで範囲をひろげて、ある程度の種類数が揃うのを最小

面積とします。したがって、高い木は“赤松”低い木は“そよご”とか、多くの“草”があるのを条件とします。経験的にいうと、“すすき”などの原っぱだと1㎡、森林は100㎡でだいたい出揃います。その中で密度、種類等を調べ、どういうタイプの植物がどういう環境の中において生植しているのか、又どう変化したかを調べるのが植生調査です。

—— 秋神川の流域（尾根は継子尾根）を調査するためには、いくつ位のポイントが必要ですか。

小野木 高さによる垂直分布の典型だから、高山帯、亜高山帯、低山帯の大きく3つ、その中で、又細かく、例えば、ハイマツ帯、高山草原帯といったように調べていくのです。

—— 大変時間がかかりますね。

小野木 そうですね、金と時間と根気ですね。

—— 御岳の特徴ある植生というのは……。

小野木 そうですね、御岳の場合、ちょうど日本の中央部にありますから、日本海側の雲の多い地方の植物と、太平洋側の植物が、ミックスしているのが特徴といえれば特徴ですね。植物の社会からみた分布で、一つ一つの物を見ていくと、例えば、高山植物の場合、乗鞍にあっても御岳にないとか、御岳にあっても白山にないといったように、個々

による特別なものもあります。コマクサやチシマギキョウは、乗鞍・御岳にありますが白山にはないですね。御岳に多いのは、セリバシオガマですね。本州中部の山岳地帯のみにある日本独特の高山植物ですが、乗鞍にはないのですよ。このように一つ一つの限られた植物の分布もおもしろいですね。そう、特にオバサ草は、1属1種の、御岳周辺のみにある、日本固有の植物もあります。これは世界中でここだけです。かと思うとヒマヤラにもある共通の植物もある。シダレオモトなどがそうですね。このように植物は、教科書的に垂直分布するものもあれば、ヒマヤラと結びついたり、シベリアと結びついたり千差万別で調べていると次から次へと興味がわきますね。

—— 高山植物に特に興味があるのですか。

小野木 そういうわけでもないが、興味あるのは岐阜県の植物の社会全体ですね。そうだから、あちらこちらといろいろ歩くわけですね。御岳には年に5回位行きますよ。

—— 御岳が有史以来始めて噴火しましたが、植生的な影響何かありますか。

小野木 そうですね。考え方によっては、すばらしい研究材料ですよ。植物の社会から見た場合、岐阜県側は影響はありませんが、長野県側の山頂部分、特にハイマツ帯は全滅ですからね。これが今後どう変化、回復してくるかということは、スケールの大きい実験材料ですね。ただ、金とひまがいりますが。自然界の出来事は実験出来ないですから。桜島の場合は、いつの溶岩かわかっていますから調べていますが、御岳の場合は、これからスタートし、継続すればすばらしいことですよ。営林署が少し手をつけていますが。噴火した時は、家内と一升飲みましたよ。我々にとっては、大自然のスケールの大きいドラマですからね(笑)。

●オリジナルな自然の少ないヒマヤラ

—— 今年一緒にヒマヤラへ行きましたが、外国の自然なんかどうですか。

小野木 自然ですか。いろいろの国の植物も見たいと思うと同時に、人と自然のかかわりも見たいと思います。特に高山植物もみたいから山登りもします。私の場合“登山”といわないで、単に“山

登り”といいます。登山は精神活動の一端ですね、登るだけならビルを登ればいいですよ。そこに何らかの学習が必要だと思います。特に自然対人間といったような。それらを見ていると、生きている物に関心が移ります。生命の素は植物ですから。つきつめれば、最も身近なものは人対自然ですね。だから、世界の人対自然を見たいと思います。だから僕は、ヒマヤラへ行っても山登りですよ。登山家は、登山家の生き方でいいし、僕は僕の生き方でいいと思います。ヒマヤラ協会も、多方面からのアプローチで力を発揮すべきでしょうね。

—— 自然保護の観点から。

小野木 悪いのは、企業、行政ではなくて、最終は個人ですね。一人一人の認識を高めるために自然教室など開き、正しい自然観を育てる教育が必要だと思います。私は、インドやヒマヤラへ行って、その国の自然に対する考え方を勉強してくるのです。

—— 小野木式自然観の哲学は。

小野木 日本の場合、自然観察という学問は、明治時代に移入した、ナチュラリ・ヒストリーですね。これを当時“博物学”と訳し、動植物の姿・形を詳細に記録したようでした。現代風の暗記的な学問だったのですが、僕はストレートに自然史といっていますよ。地域の動植物の種類や姿・形、これらの歴史的背景、等をひくくめて現在の人間とのかかわり、又将来におけるあり方を考えるのが、正しいナチュラリ・ヒストリーだと思っています。人間の生活は、全てが自然を背景にして成り立っているのです。自然を学び、自然を活用したチェが、代々受け継がれてきているのです。やはり、自然理解が根本ですね。ネパールに便所がないのは、ネパールの自然的要因が必要としなかったのですね。日本は、湿気が多いから昔からあったのです。だから、高度な文化とか低い文化といったように、いちがいに、いえないですね。やはり、その背景が大切ですから。

—— ヒマヤラの自然は、大自然ですか。

小野木 今回行って、一番びっくりしたのはヒマヤラ自体、大原始林の聖域、未開のオリジナルなものと思っていましたが、限度ぎりぎりまで人間が活用しているのには、ほんとうにびっくりしま

した。そうですね。ゴンベダンダの一番高い所の部落は2,800 mですし、夏は4,500 m付近まで活用していますからね。まだ御岳の方が自然が残っていますよ(笑)。ヒマラヤは高山植物の世界でも牛の影響を受けていますね。これにはおどろいたですよ。むしろ、ヒマラヤの方がオリジナルな原始は破壊されていますね。逆にいうと、そこまでしなければ、人間の生活が成り立たないということですよ。

—— 日本的に言えば自然破壊ですね(笑)。

小野木 生産性が低いからやむを得ないですね。

—— ヒマラヤからみれば、日本の方がまだオリジナルな自然が残っていますね。

小野木 それはやむを得ないですね。人の生活があるのですから、工業で成り立つ日本と、農業、特に原始農業で成り立つ国のちがいですね。

—— 話は又もどりますが、今の子供達は、あまり自然に接していないように思います。

小野木 そうです、今の子供達は、自然に接していないから、自然からの感動がないですね。1年に1度もヘビやカエルを見ない子供もいるくらいですから。親がこの現実をよく認識しなくてはいいですね。だから四季おりおり外へ出ることですよ。山へ登ることですよ。前向きにやらなければいけませんよ、未知なことをやる冒険が必要です。日本には、こういった指導者が少なく、自然教室といっても、現在の中味は、団体行動訓練みたいですね。ヒマラヤ協会にはこういった人材が多いと思いますが。山の麓の子供が、山に登らない時代ですから。

—— 一番いいことは。

小野木 せっかく山に登るのだから、単に登って頂上に行くのではなく、舞台を太いに活用すべきですね。御岳の場合ですが、夜10時頃登って、日の出を見て、すぐに下に降りてしまうのが大半ですね。しかも、又下で一泊するのですよ。そうならば、日の出を見て、もっとゆっくり下ればいいのですよ。下に3時頃着けば良いのだから。お金を使ってくるのだから、もったいないですよ。まわりに知的学習が出来る場があるのだから。親子で楽しむべきですよ。皆がもっと身のまわりの自然を大切にすべきですよ。

—— 自然を大切にするという問題意識は大変むずかしいと思います。

小野木 そうですね。極端に言えば、自分達の生活をよりよくするためです。生命の源ですよ。雑草、雑草といいますが、これがあるから、人間は生きていけるのです。セイダカアワダチ草は、悪者のようにいわれますが、酸素をずいぶん出すのですよ。植物が発生して酸素を出すようになったから、酸素を消費する動物が生まれたのです。各務原市や岐阜市は、人が多くて、酸素の発生量が少ないから、皆、窒息して死んでしまいますよ(笑)。たまたま空気は循環しているから助かっていますが。

—— ヒマラヤや熱帯のジャングルは、世界の人人にとって、かけがえのない大自然ですね。

小野木 その通りですよ。だから、日本の企業が南方へ行って平気で木を切っていますが、この所を大切に考えないといけませんよ。一番酸素を出すのは、ヒマラヤまで続いている照葉樹林帯ですよ。だから、自然を大切にしなければいけませんよ。一端、破壊された自然を回復するには天文学的なお金が必要ですからね。

—— ヒマラヤの話を中心に話を伺おうと思っていましたが、自然観、自然保護が話題の中心になってしまいました。最後に再度“ヒマラヤ”に行くとしたら、目的は何ですか。

小野木 そうですね。ゴンベダンダの尾根の植生調査がしたいですね。カトマンズにも近いし、誰も手をつけていませんから、特に、ラリグラスを中心に。今回は、予備的なものでしたから。

—— どうもありがとうございました。

(インタビュー構成：岩水竜峰)

カンチェンジュンガ遠征隊募金について

1981年H A Jが主催するカンチェンジュンガ遠征隊は、8,500 m三山を縦走するという空前絶後の計画です。H A J会員一人一人の皆様のご協力を是非お願い申し上げます。

《募金要領》

○金額 1口 1万円

○払込 日本ヒマラヤ協会(カンチ)

地域ニュース

＜ 中 国 ＞

代表団から得た最新情報

中国登山友好代表団は9月4日、日本山岳協会主催で行なわれた登山懇談会の席上、質問に答えて以下のことを明らかにした。

(1) 解禁峰の申請状況（いづれも春、秋シーズン）

・チョモランマ(8,848m)	85年まで
・シジャパンマ(8,012m)	83 "
・コングール(7,719m)	82 "
・コングールチュベ(7,579m)	82 "
・ミニャコンカ(7,590m)	82 "
・ムスターグアタ(7,546m)	82 "
・アムネマチン(6,282m)	81 "
・ボグダ(5,545m)	82 "
・チャンツェ(7,553m)	
・モラムチュ(7,661m, シジャパンマ西峰)	

(2) 解禁峰2座増える。

史占春氏があきらかにしたところによれば、中国側としては、次の2峰も解放している。

a. チャンツェ(7,553m) チョモランマのノースコルの北に聳える未踏峰。

b. モラムチュ(7,661m) シジャパンマの西峰で未踏峰。

(3) 新解禁峰の見とおし

四川省、新疆省、青海省の山を中心に徐々に解放する模様。なお、チベットについては多くの外国チームを入れることは困難な模様。

(4) 解禁峰のシーズンについて

春、秋に限らず申請するシーズンは申請者側の自由である。

(5) 同一隊に同シーズン2峰は許可しない。

同一隊が同シーズンに複数のルートから登山することは許可されるが、同一隊が同一シーズンに2峰の登山を申請しても許可されない。

(6) 未解禁峰への申請

現在開放されていない峰への申請書は一応受理するが、受理したからと言っても開放することとは別問題である。 (文責：山森)

＜ パキスタン ＞

◎ カラコルム・ハイウェー(KKH)の通行が昨年から外国人にも認められる様になった為、ヒスパー山群やバツラ東部の山々も容易に近づける様になった。登山隊の場合はトラックやミニ・バスをチャーターしギルギットやフンザ方面へ入っている(今年はトラック1台3,000～3,500Rs、ミニ・バス1,500～2,000Rs)。しかし小人数だったり荷物が少なければチャーターの必要はないだろう。ラワール・ピンディからギルギットで乗り継ぎ、フンザまで定期バス(要予約)が運行されているのだ。ラワール・ピンディを毎朝4時に出発してギルギットには夜7～8時頃に着く。運賃は46Rsとの事。トレッキング程度の荷物ならバスの屋根に乗せてもらえる(少し多いと別料金を請求される事もある)。ギルギットからフンザへも1日数便定期バスがあり、所要時間約4時間、料金は12Rs位だったと思う。フンザ～ナガール間にはジープとトラクターのみが不定期に走っており、チャーターした場合の料金はガーバメント・レートでそれぞれ1台120Rsと300Rs。

◎ 本年7月頃より、パキスタン政府はツーリストに対するビザの発給を、従来の3ヶ月間から1ヶ月間に突如短縮した。加えてKKHの通行許可もツーリストには一般に8日間しか発給しなくなった。これではトレッキング・パーミッションなしにギルギット方面へ入域するパーティは、ほとんど氷河すら踏めずに帰らなければならない。もし日数をかけてフンザ以奥へ入ろうとするなら、必然的にトレッキング・パーミッション(許可されればビザは3ヶ月まで延長可能)を取得せざるを得なくなったわけだ。

◎ 従来トレッキングにはリエゾン・オフィサーの同伴が義務づけられていた。だが今年からリエゾンの替わりに政府登録のマウンテン・ガイドを雇用すれば良くなった。今までリエゾンとのトラブルが大きな問題とされていただけに、この面では大部やりやすくなったと言えるだろう。

トピックス

『ヒマラヤ』合本を製作

前号で「ヒマラヤ」の合本製作をお知らせしましたが、前回製本のうち41号～60号の分が若干数残っていますので希望される方は事務局まで申込んで下さい。価格は8,000円です。

『リック・リッジウェイ氏』来日する

「ちょっとエベレストまで」の著書が話題になっているアメリカのK2無酸素登頂者のリック・リッジウェイ氏が今秋の中国登山に向う途中来日し、東京・池袋のUSトレードセンターにて歓迎会が行われた。会場では、1978年に行われたK2のスライドが行われ、又同時に来日した、シュイナード氏の1968年フィッツロイ登はんの様子が16mmで紹介された。

『M・S・コーリー氏』9.8来日する

インド登山財団(I・M・F)副総裁のM・S・コーリー氏が来日し、歓迎会に稲田専務理事が出席し懇談した。又、9日は角田編集長の案内で東京のショッピングを楽しんだ。10日離日。

インフォメーション

ネパール語を教えます

日本語を勉強するため来日中のネパール青年、R・シュレスタ君が、ネパール語を教えることを希望しています。同君は東京に在住中ですので近辺の方で興味のある方は下記へお問い合わせ下さい。尚、本人は日本語の日常会話に不自由しません。

峭峻の白き尾根 — DHAULAGIRI・I—1978

1978年ダウラギリI峰の南東稜から登頂に成功した群馬岳連隊による公式報告書。B5版305

頁。カラー12頁。

東京定例会集 — 10.30

10月の東京定例会集は、本年の登山学校の隊員を囲み、聖なる河ガンジスの源流ガンゴトリ周辺の自然と人について話し合いをする予定です。ふるって御参加下さい。

◇10月30日(木)午後6時30分より

◇HAJルーム

海外登山研究会(都岳連)

東京都山岳連盟では下記のとおり恒例の海外登山研究会を開催します。

《期日》10月25日(土)～26日(日)

《場所》オリンピック青少年センター 渋谷区代々木神園町3-1 TEL 03-467-7201
(小田急線参宮橋下車 徒歩5分)

《費用》一泊三食資料代込み 5,000円

《内容》中国登山の現状と申請手続

○講師 京都山岳会 遠藤京子氏他
トレッキングで登れる山の諸問題
登山報告

ネパール：ラムジュンヒマール

パキスタン：ジュトマウサル

インド：ケダルナートドーム

講演 — 中国の山々

講師：水野 勉 氏

夫婦でネパールの高峰へ！

HAJでは複数の夫婦パーティによるヒマラヤ登山をネパールの高峰で行うべく準備を進めております。時期は1983年プレモンスーン。興味のある方は下記までご連絡下さい。

新刊図書一覧

- ①望月達夫、「折々の山」、茗溪堂、1980・7、337p、1,200円。
- ②金子民雄、「ヘンデン伝——偉大なるシルクロードの探検者——」、新人物往来社、1980・9、270p+写真+スケッチ、1,500円、(新装版)。
- ③樋口隆康、「バーミヤーンの石窟」、同朋舎、1980・、246p、6,000円。
- ④矢野道雄・編、「インド天文学・数学集」、朝日出版社、1980・、
- ⑤森 豊、「シルクロードの象」、六興出版、1980・8、226p、1,600円。
- ⑥園田一亀・著／荒川秀俊・解題、「韃靼漂流記の研究」、原書房、1980・8、4p+9p+328p+10p、3,600円、(「ユーラシア叢書」34、復刻版)。
- ⑦山田憲太郎、「香葉東西」、法政大学出版局、1980・9、252p+vi、1,600円。
- ⑧吉沢一郎、「山へ——わが登高行——」、文藝春秋、1980・8、326p、1,600円。
- ⑨刘安武・編選、「印度現代文学研究——印地語文学——」、北京、中国社会科学出版社、1980・3、363p、1.10元=660円、(中国語版、初版11,000部、現代ヒンディー語文学概説書(ヒンディー語)の翻訳)。
- ⑩吉沢一郎・河西俊郎・田村宣紀、「ヒマラヤの賦——ギャチュンカン・バインダーブラック・マナスル——」、桐原書房、1980・9、275p、1,800円。
- ⑪佃実夫、「佃実夫の中国紀行アルバム」、日外アソシエーツ、1980・7、181p、3,500円。
- ⑫上田哲農、「きのうの山、きょうの山」、中央公論社、1980・9、214p、1,200円。
- ⑬石井貞夫、「カナディアン・ロッキーズ——白い氷雪の山々——」、岳(ヌプリ)書房、1980・9、250p、1,800円。
- ⑭吉林省民間文芸研究会吉林分会・編、「吉林民間故事選」、長春(吉林省)・中国、吉林人民出版社、1980・6、193p、0.70元=420円、(中国語、初版20,880部)。
- ⑮新疆人民出版社・編、「新疆兄弟民族民間故事選」ウルムチ(新疆省)・中国、新疆人民出版社、1980・1、191p、0.51元=360円、(初版30,000部(中国語版))。
- ⑯貴州民族研究所・編、「貴州の少数民族」、貴陽(貴州省)・中国、貴州人民出版社、1980・2、149p、0.60元=360円、(中国語版、初版3,200部)。
- ⑰呂澂、「印度佛学源流略講」、上海・中国、上海人民出版社、1979・10、346p、1.30元=780円、(中国語版、初版12,000部)。
- ⑱馮承鈞・原編／陽峻崙・増訂、「西域地名(増訂本)」、上海・中国、中華書局、1980・3、(2版3次印刷)、0.52元=320円、(中国語版)。
- ⑲平山郁夫、「シルクロード素描集(1)——西域の旅——」、平凡社、1980・9、130p、3,800円。

(資料：藤井 毅)

「ヒマラヤ」表紙写真募集

「ヒマラヤ」表紙の写真は会員の皆様より応募したものを、毎月一作づつ掲載する予定であります。ふるって御応募下さい。採用分には全国共通図書券を差しあげます。

《規定》

- (1)モノクロでキャビネ判以上であること。
- (2)被写体は広義に解釈したヒマラヤ地域のものであること。
- (3)未発表であること。

- (4)なるべくあまり知られていない角度からの写真、ある、は未知の地域の写真を期待します。雑誌、広告等で頻繁に見うけられるような写真(例：カラバタからのエベレスト)などは御遠慮下さい。

《送り先》

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1

淀橋食糧ビル506号

HAJ「ヒマラヤ」編集部

日本ヒマラヤ会議開催予告

前橋・大町

◎前橋会場

群馬県山岳連盟と共催して行います。

《日時》1980年11月2日(日)12時～3日(月)15時

《場所》新花茶屋 前橋市敷島町 240-22

電話番号(0272)31-3848 前橋駅よりバス乗場
8番群馬バスバ園行、11番東武バス川原町行
に乗り共に敷島公園下車

《日程と内容》

11月2日(日)

12:00～13:00 受付
13:00～13:30 開会・あいさつ
13:30～15:00 インドヒマラヤのすべて
15:00～17:00 パネル討議「高所医学」
17:00～18:00 ヒマラヤ登山とトレーニング
18:00～18:30 日本のインドヒマラヤ登山の変遷と事故
18:30～ 夕食・懇談・情報交換

11月3日(月)

9:00～12:30 1980年インドヒマラヤ登山報告
ケダルナート、パンワリドワール、
カルチャクンド、シブリン、バギラ
ティII、CB53を予定
12:30～13:00 昼食
13:00～14:30 パネル討議「インドヒマラヤ登山をとりまく諸問題」
14:30～15:00 記念撮影・閉会

《参加》この会議の主旨に関心を有する者で、所属、経験を問いません(定員100名)

《会費》7,000円(1泊3食付・資料代込み)

◎大町会場

《日時》1980年11月16日(日)9時30分～17時

《場所》山岳総合センター・大町市大字大町字
樋沢 8056の1
TEL 02612-2-2773

《日程と内容》

9:30～10:00 受付
10:00～10:30 開会・あいさつ
10:30～11:30 ヒマラヤ登山とトレーニング
11:30～12:30 ヒマラヤ登山と事故
12:30～13:30 昼食
13:30～15:00 ヒマラヤ最新情報
インド、ネパール、パキスタン
15:00～17:00 1980年ヒマラヤ登山報告
インド、ケダルナート、
ネパール タムセルク
パキスタン ガッシャブルムII
17:00 閉会

《参加》この会議の主旨に関心を有する者で、所属、経験を問いません(定員50名)

《会費》2,000円(資料代込み)

カンチュンジュンガ隊に御協力を!!

昨今のネパールではシェルパ・ポーターへの支給品が大きな数量を必要とするようになってきており、カンチ隊も苦慮しております。使わなくなったり、押入れの隅に入ってる登山用具・衣類等をお持ちの方、御寄贈いただけたら幸甚です。よろしく願い申しあげます。

※例えば……山靴、キャラバンシューズ、ニッカーズボン、ボンチョ、ヤッケ、オーバー手袋、毛の手袋、靴下、etc…………。

《連絡先》HAJ事務局 03-687-8521

〒160 東京都新宿区高田馬場 3-23-1
淀橋食糧ビル506号

特集 KARAKORUM' 80

ネパールヒマラヤとは空の青さも住む人々も大きく異なるカラコルム—まだまだ処女性を失なうことなく我々を誘う。

今回は1978年の雪辱を果たしジュトマル・サール(7,330m)に初登頂した東京志岳会隊とG II(8,035m)登頂のベルニナ隊の記録をお届けする。

はじめに

ジュトマル・サール(7,330m)はカラコルム山脈ヒスパー山群のやや東よりに位置する。この山を計画した当初、カラコルムではシアチェン氷河流域、バツラ山群、そしてこのヒスパー山群は未登峰の宝庫であった。我々はほとんど資料すらないこの山に未知なる魅力を感じて、1976年の偵察活動の後、78年8人の仲間と共にこの山を目指した。当時カラコルム・ハイウェイ(KKH)の通行が認められなかった為、アプローチはスカルドゥから入山しヌシク・ラ(4,990m)越えのルートをたどった。しかしヌシク・ラの下降で難渋し、若干の物資を失ない、加えて精神的、肉体的疲労を残してBCへ入った。登山も惨憺たる結果で終わった。主稜線を越えてアッパー・ヤズギルの大雪原へは出たものの、途中のキャンプが雪崩に襲われて隊員、ハイ・ポーター計5名が死亡し登山は即刻中止された。だが山登りをやめるなり、他の方向に転進するならばともかく、私は以然ヒマラヤを目指した。従って私にとってジュトマル・サールはさけて通れない山になった訳だ。

再び山へ

5月19日夕刻、本隊4名はイスラマバード空港に降り立ち、ただ1人の先発隊員としてやってきていた渡辺と合流。翌日から日本大使館への挨拶、外国人登録、ブリーフィング、KKHの通行許可証取得、そして装備や食料の購入とお決まりの仕事を終え、27日早朝ラワール・ビンディをあとにした。

陸路によるギルギットへの通行はミニ・バスで15時間、荷物を乗せたトラックでは2日前後かかる。我々はルプガル・サールへ向う駒沢大バー

JUTMAR SAR

ジュトマル・サール——7330m

東京志岳会

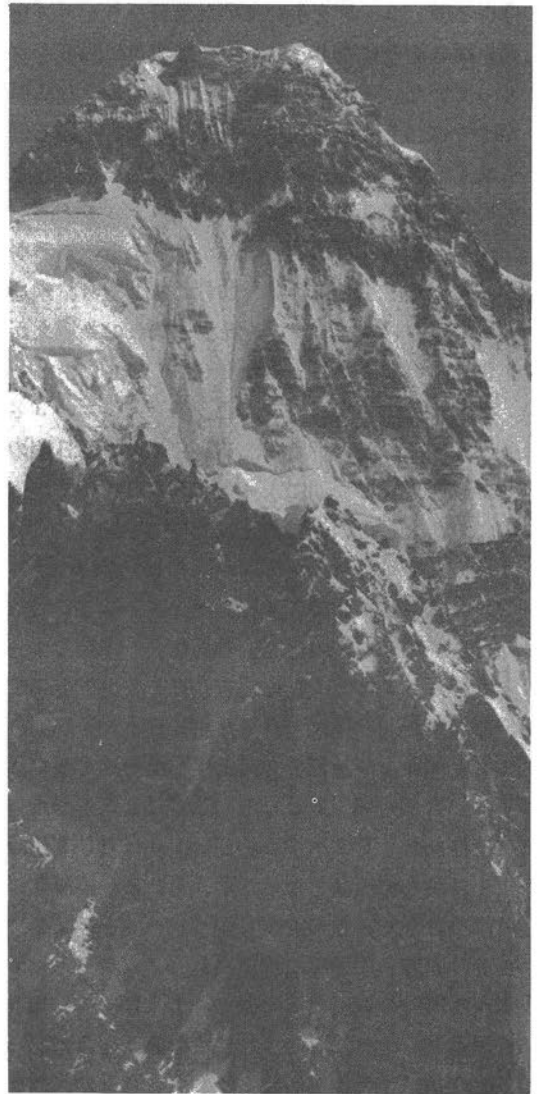
ティと共同でトラック、ミニ・バス(12人乗り)各1台をチャーターし、各隊から1名ずつトラックに同乗させた。途中2ヶ所のチェック・ポストを通過し、ミニ・バスは夜の8時すぎにギルギットに到着した。翌朝DCへの挨拶、野菜等を購入した後、午後フンザのプリンス・ホテル(名前ほど立派ではなく、1ベット10Rsの安ホテル)へ入った。夕方隊荷を積んだトラックも到着して、また全隊員の顔がそろい—安心する。29日、トラクター2台、ジープ4台にて2隊分の隊荷、隊員を分乗させてナガールへ向かう。途中ラカボンやウルタル・ディラン北面の眺めなどを満喫しながらナガール着。

ナガールでは2日間滞在し、キッチン・ボーイ、ヘッド・ポーター各1名、クーリー56名を雇った。クーリーのうち3名はマジレストレーターの推薦によりBCから上ではハイ・ポーターとなる者も含まれている。賃金はレギュレーション通り食料代込みで112.5Rs、BCまでの行程は実働7日という契約であった。当初、食料代を払った他に食料を背負うポーター27名を雇えとまったくむしのいい要求を出された。当然突っぱねると、27人が15人に減り、さらに12人になり最後

は6人だけでもという。しかしたとえ1人といえども、これは不当な要求であるから認められんと言くとポーター達は全部帰ってしまった。だがナガールを離れるまでは登山隊側が有利な事をポーター達も知っている。やがて1時間ほどするとポーターの代表がやって来て、3人だけでいいから雇ってくれというのでようやく妥協した。

6月1日、キャラバン出発。ナガールからヒスパール村へは、ヒスパール川をはさんで兩岸に道がつけられている。左岸の道は2日、右岸は3日かかるとの事。ポーター達は今年は左岸の枝沢が増水して渡れないとウソをつき、我々の主張を無視して強引に右岸を進む。ヒスパール村ではポーター全員を入れかえろと要求される。荷物が重いと毎朝ゴネるポーターもいる（彼らに限って25kg以下の荷物だったり……）。そして休憩ばかりのノロノロ作戦で日程を引き延ばす。たまに早く歩くポーターがいると他のポーターがクレームをつける。常に固く結束して全員同一行動だ。7日目セカンバリッシュ着、翌日は休養とする。9日は今までの遅れを取り戻すべく、セカンバリッシュからBCまでの2日行程を1日で行くと約束していた。しかし早朝からいつもにない早足で2時間ほど歩きジュトマル氷河の2kmほど手前まで来ると、ここがBCだと言い張って動かなくなった。数時間の交渉の結果、一部のポーターが動こうとすると、この動きを阻止するポーターとの間で暴力ざたとなる。リエゾン・オフィサーまで殴られそうになったので仕方なく、12名のポーターを残して他は全員解雇した。

10日、隊員も加わりジュトマル氷河出合まで3往復の荷上をする。翌朝も寒いからと6名のポーターが帰る事になった。そしてセカンバリッシュからのリターン・チャージを2日分払え、払わぬでまた暴力ざたとなる。12時過ぎ6名のポーターと隊員で荷上に向う。3時頃から雪が降り出し、16時40分西俣の出合をデボ地点として引返した。16日夕刻BC入りし、翌朝からデボ地点まで逆ボッカに下る。BCとデボ地点は登りで1時間ほどの行程だが、ハイ・ポーターは1日2往復しかないと言ったので全員クビにした。19日に荷上を完了し、夕方BC建設祝いをやった。



登山活動

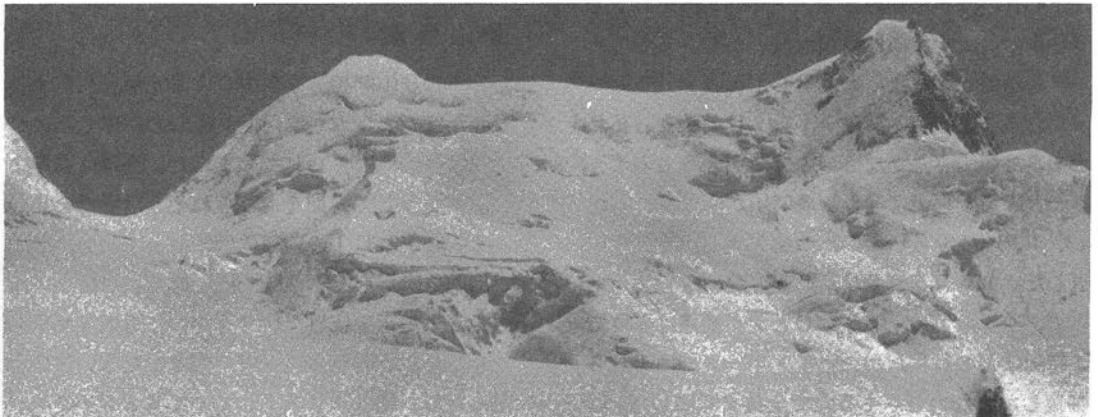
21日登山開始。全員でC1予定地を往復する。一昨年はジュトマル氷河北俣源頭の左岸よりにC1を置き雪崩にやられてしまった。今年は右岸よりにかろうじて雪崩をさけられそうな場所を見つける。しかしC1の前後数kmに渡って側面からの雪崩の危険があり、気味の悪い所だ。帰路小アイスフォール帯を抜けた所でうかつにもアンザイレンを解く。一昨年のクレバス帯はまだ深い雪の下だったし、朝はクラストしていてヒドン・クレバスの危険を感じなかったからだ。クレバス帯を抜

けきる頃、トップを歩いていた渡辺がクレバスを踏み抜きそうになり、ストックで慎重に回りをさぐっていた。その時、早足で追いついてきた江原がやや遠回りに渡辺を追い越そうとし、止める間もなく一瞬のうちにクレバスに落ちた。絶望感と共に自分の馬鹿さ加減に怒りが込み上げてくる。だが幸運にも江原は深さ18mほどの所にひっかかっていた。引き上げると肋骨骨折と全身打撲を負っており、ショックと全身ずぶ濡れの為震えが止まらない。22日、彼をBCに収容した。

24日登山再会、以後渡辺、茂木、杉本の3名1パーティのみの行動となる。C1まで2日間の荷上後悪天候の周期に入った。28日にC1の途中まで荷上したのみであとは6日間停滞。7月2日、ようやく晴れたが雪崩が落ちるのを待つ為停滞。3日、C1建設。4日、チョタ・リッジに取り付き、雪のかぶった脆い岩場を、一昨年のルートにそって8ピッチ登る。夜、C1テント上を雪崩の爆風が通り過ぎて行った。5日は天候が崩れチョタ・リッジ基部まで荷上げしたのみでBCへ下る。8日未明、BCを出発してC2下までルート工作をし、C1へ泊る。9、10日でC2建設。11日から悪天候となったが、13日(停滞)以外は小降りだったので少しずつルートを伸ばし、15日夕方、主稜線に飛び出し、アッパー・ヤズギル氷河の一端にC3を置く。17日、久しぶりの快晴だ。それにしてもこの大雪原はどうだ。6,000m以上の標高に幅2km、長さ8kmの大雪原しかも回りには素晴らしい雪の山々……。渡辺がトップで出発、彼は体重も荷物も重い為フィルム・

クラストを踏み抜いて歩きにくそうだ。僕も茂木もほとんどもぐらない。そのうち北稜上に朝日が上った。すると大雪原は黄金色に輝き、ユクシンやジュトマルが替わる替わるにガスの中から顔を出す。なんと幻想的な光景だろう、思わずさげびたくなってきた。南側にはハラモシュやスパンティック、遠くにはナンガ・バルバットも望まれる。西には遠々と続くヒスパーの山々、幾ら眺めていてもあきない景色だ。約2時間で大雪原を縦断し終えた。ここから軟雪に悩まされ、今日は北稜への斜面の途中にある小台地をC4とした。18日天候は下り坂だが4時40分アタックに出かける。しかし、9時すぎ、6,800m付近で雪が降り出し視界がまったくきかなくなった。ツェルトをかぶって2時間ほど待ったが、晴れる見込みもないのでC4へ引き返す。19日、雪の為停滞。20日も雪、食料が付きたのでBCまで撤退と決め、ラッセルに苦しみながら夕方C3へ下った。ここにも食料はない。

21日、なんと今頃快晴になろうとは……。今年のカラコルムは天候が悪く、一担BCへ引き上げると、次のアタック時の天候が保障されない。だからこの快晴を逃がすまいということになり、残飯をかき集めて9時50分出発。昨日のラッセルは強風にかき消されているため今日も苦しいラッセルだ。夕方C4着、大休止の後、月明りを利用してさらに上部上向う。0時25分6,800m付近でツェルト・ビバークする。22日5時45分、杉本トップでひざ位のラッセルの中を進む。徐々に傾斜が増し、雪崩そうな薄気味悪い急斜面

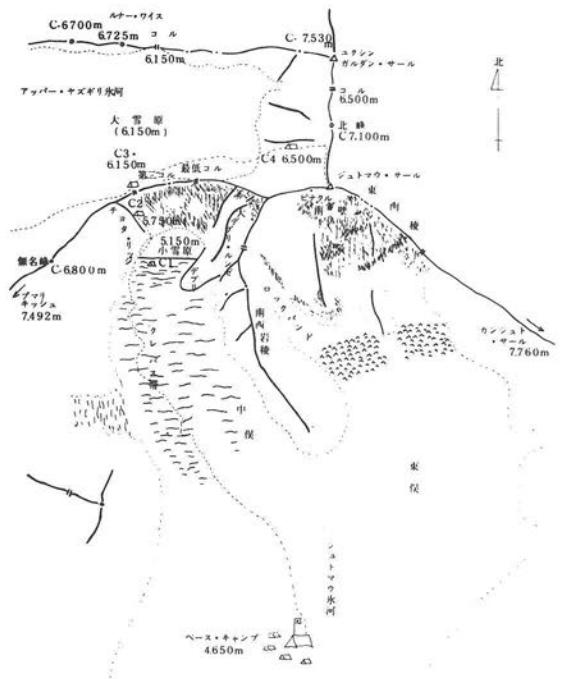


アッパーヤズギル氷河からのジュトマル・サール

をなんとか雪板の上に乗ろうとするが、ひざを乗せて体重をかけると雪板が割れてしまう。あと10mほどで傾斜が落ちる所まで来たとき雪板雪崩が発生し、杉本が捲き込まれる。300mほど流されて深さ20mほどのクレバスに落ちた。だが幸運にもかすり傷すら負わず、クレバスの外に這い出した。9時15分北稜着、この頃より風が強くなってきて呼吸が苦しい。頂上直下の氷壁を西面から回り込み、さらに1ピッチ登ると突然岩峰が視界に飛び込んできて驚ろかされる。頂上の一角にたどり着いたのだ。ピナクルは頂稜から南壁側に10mばかり離れた所から7~8mの高さで突立っている。頂稜は東西にのび4つほどの小さな雪のコブが並んでいる。気抜けして這うように一番東奥のピークまで行くとそこが頂上だった。

《山名について》

ポーランドの地理研究家J・ワラは近年この山に氷河の名を取ってYutmar Sarと命名した。氷河の名前は近くの放牧地から取られたようだ。ところでヒスパー・ポーターはこの放牧地をジュトマルまたはジュトマウと呼んでいる。従って山名は現地名を尊重するのがヒマラヤでの習わしであるなら、Yutmar SarではなくJutmar Sarが適当と思う。



ジュトマル・サル概念図

《東京志岳会ジュトマル・サル登山隊1980》

隊長：杉本忠男(33)、渉外・輸送：渡辺 優
(30)、食料・会計：江原祥司(27)、装備・

記録：茂木正広(25)、医療：加藤亮子(45)

(文責：杉本忠男)

原稿募集

ニュース ヒマラヤ(中央アジア含む)の各地域の社会情勢・現地事情(入山事情)の変化、日本を含む各国登山隊の動勢、その他気のついた事をお知らせ下さい。ニュースソースも併記して下さい。

紀行 遠征、トレッキング、旅 etc……。

ヒマラヤ及びシルクロードに関する地域なら何でも結構です。「記録」ではなく「紀行」としてお気軽に御投稿下さい。400字詰原稿用紙6~8枚程度、横書きをお願いします。

日本からヒマラヤから ヒマラヤ等に出かけた際の印象、現地からの便り、ヒマラヤに関して日頃思っていること何でも結構です。「ヒマラヤ」編集部やH A Jに対する提言などもお寄せ下さい。

またヒマラヤ地域へ出かけられる方、ハガキで結構ですから御一報下さい。

★ 投稿は会員、非会員を問いません。採用分には掲載誌を贈呈致します。

★ 送り先〒160 東京都新宿区高田馬場3-231-1 淀橋食糧ビル506

日本ヒマラヤ協会「ヒマラヤ」編集部 TEL 03-367-8521

GASHERBRUM II

ガッシャーブルムⅡ - 8035m

ベルニナ山岳会ガッシャーブルムⅡ峰登山隊

「八千メートルの頂へ」を合言葉に我々は、今回のヒマラヤ行を結成した。当初佐藤隊長よりガッシャーブルムⅡ峰案が提出されたが、各自思い思いの山があろうという事で検討した結果全員一致で同峰に決まった。バルトロ氷河へは過去、日本隊としては数隊が入り新鮮さはやや薄らいだものの、景観、雄大さには魅力的なものがあり、我々をそのトリコとしてしまった。

1.南西稜～東稜（ノーマルルート）、2.南西稜～北西稜（ポーランド隊）、3.南東稜～東稜（フランス隊）の3ルートが過去に登られたもので、当会としては下部南西稜から上部は新ルートの南西岩稜を目標にとルート選定する。山、ルートが決まり、いよいよ我々の情熱を叩きつけ、長い間夢みた「ガッシャーブルムⅡ峰への道」が始まるのである。

ガッシャーブルムⅡ峰・過去の登山隊

1. オーストリー隊、1956年、南西稜～東稜經由で登頂。
2. フランス隊、1975年、南東稜から登頂。
3. ポーランド隊、1975年、南西稜～北西稜經由で登頂。
4. 登はん倶楽部岐阜隊、1976年、事故により敗退。
5. チリー隊、1979年、登頂、南西稜～東稜。
6. オーストリー隊、1979年、南西稜～東稜經由で登頂。

アプローチマーチ

佐藤隊長他3名は5月19日に成田を立ち一路イスラマバード空港へと向う。翌日我会の「世界を放浪する旅人」恵野木と半年ぶりの再会をし、積もる話に花を咲かせる。宿舎であるミセスディビスホテルでは猛暑の中、連日の梱包作業、雑務に追われながら7日目を迎えると後発隊の日高、福島、鳥山の3名が無事到着。当初の予定では、隊員7名という事であったが恵野木からぜひ今回の登山隊に加えて欲しいとの強い要望があり、急遽1人加わりベルニナ八人衆としてガッシャーブルムⅡ峰に挑むこととなった。恵野木は今回の遠



征隊員でなかった為、本人、我々共装備品の用意をしていないのでC1ないしC2迄ということで互いに了解する（実際はシングルの靴でファイナルキャンプより上の約7,200m地点迄登る）。猛暑の中での作業も順調に進み5月28日佐藤、恵野木をホテルに残し（アワン長官に恵野木が臨時参加する許可を得るために残留する）空路スカルドへと、右に豪快なナンガバルバットを観ながらラワルビンディとは打って変わった様な涼しいスカルド空港に到着する。

スカルドは標高2,400mという高所な為、気温が低く住みごこちの良い所である。日本でいえばさしずめ軽井沢か那須の別荘地というところであろう。ポーターへの支給食料は全部ここで購入しK2ホテルで大掛かりな再梱包が始まる。ポーター一人一人の荷物の区分を終えると約2.5トンの



荷物は94人のポーターに担いで貰うこととなる。6月4日夜の未だ明けぬ4時過ぎにトラクターとジープに2.5トンの食料、装備を乗せ、スカルドを出発し一路ボンゴラへと向う。ボンゴラで3時間程遅れて来た佐藤隊長達と合流し、これからの長〜い長〜いキャラバンの幕が開ける。

連日晴天下の中、景色は良いのだがチャパティ（朝、昼食）のヒドさには辟易とした。最初のうちは8人で20枚近く焼いてもらっていたが結局消化枚数は5枚位いとその人気の無さは断然である。ネパール経験者に聞くとこの辺の地域で生産されるアタの質は何せ落ちるとの事だが、これがBCまでの主食（夜だけは現地米）だと思ってしまう。食糧は私が担当していたので文句を言うどころではなく、皆からブーブと集中砲火を浴びこれから先の対策に頭を悩める始末である。

辺りの景観は流石にカラコルムの中では絶品に値いするとの評はまぎれもなく、その魅力的な山山は我々をあきさせないすばらしさがある。アスコレ辺りから見えるマンゴ・クルーズ、バルトロ氷河入口近くに聳えるパイジュの岩峰群、氷河上になるとすぐ左側にバルトロ寺院群が衛兵の如く峻立している。キャラバンのほぼ中間地点に当るリリゴのチョット先では鬼才といわれたリカルド・カシン率いるイタリアー隊が初登したガッシャ

ーブルムIV峰が暑い陽差しの中から浮かび上がってくる。ウルドカスを越えると右手に関西登高会隊が狙っているガッシャーブルムの北面が眼前に広がり、さらに左手にはムズターグ・タワー、ブロード・ピークと、どれも登りたいような峰々が次々に我々の目を楽しませてくれる。6月17日、待望のベースキャンプを設営する。ポーター達は荷運びの報酬として多額な賃金を得、笑みを浮かべながら足早にBCを後にする。我々のBC地の少し先にはI峰に挑むフランス隊2名が幕を張っている。3週間程後にはIII峰のスペイン隊、IV峰のアメリカ隊、V峰のフランス隊と国際色豊かなBC地となろう。

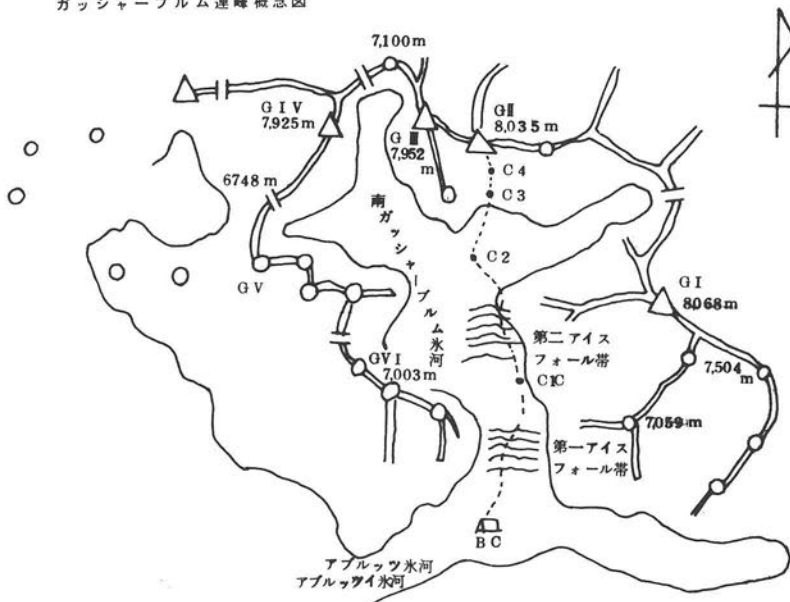
登山活動

「ついにやって来た、苦しくもあり楽しくもあり駆けずり廻って過ぎた長い歳月……俺達はそれを克服してついにやって来た……ガッシャーブルムII峰に」……私同様、皆の胸の内には似た様な想いが広がっているのではないだろうか。2日休養した3日目の6月20日より南ガッシャーブルム氷河第一アイスフォール帯のルート工作、荷上げを始める。早朝、意気揚々とルート工作隊の渡辺、今田が南ガッシャーブルム氷河に第一歩を記す。30分程遅れて荷上げ隊の恵野木、福島が後を続き、残りの4名は引き続き休養とする。

C1迄は南ガッシャブルム氷河を忠実に辿り雪原帯に入る。氷河上は幾分なだらかな所からアイスフォール帯に移るが、至る所にクレバスが散乱している。雪原帯ではヒドンクレバスがあちこちに待ち構えている。我々も気をつけながら行くが「敵もさるもの」でなかなか無事には通してはくれず、私に至っては3回程踏み抜いている。時間的には50分程の距離であるが皆くちを揃えて「ヤラシイネ」と言い合っている。荷上げ及びC2のルート工作も順調に進みこの分では早く落とせるかなと思っていた矢先に、6月28日BCに休養に降りた渡辺が呼吸困難に陥いたという知らせが入り、C1に居た我々5人はすぐBCに駆けつけたがそこには渡辺の姿はなく、アメリカ隊の方達がタンカでコンコルディアへ向って運んでいるという事をアメリカ隊の隊長より伺う。佐藤はBCに降りて直ぐにテントその他を背負い込み後を追う。残りの4人は持つて行くための食料、医療品その他のものを纏めて佐藤より2時間後の20時にコンコルディア方面を目指して足早に向う。呼吸困難の原因はどうやら肺水腫になったらしいとのことである。肺水腫は前々から死亡率が高いということは聞いていたが、幸いにも酸素吸入、下降処置が早かった為か6月30日には少し

歩ける迄に回復してきた。7月7日にコンコルディアに來たヘリコプターにて渡辺はスカルドに降り、我々は再度BCへと向い、日数はかなり足りなくなったのでルートを南西稜～東稜（ノーマルルート）へ変更し再度挑戦を始める。だが医療用として持つて來た酸素5本は渡辺が全部使用してしまったので、又同じ病気になると取り返しのつかない事になるので十分注意を払いながら通り馴れた南ガッシャブルム氷河に足を入れる。7月11日、C2を設営し、いよいよこれから南西稜を辿りC3のルート工作に入る。200m程の氷混りの雪壁から350m位いの雪稜を登ると6,350mのC3（7月23日設営）に至る。C3からC4へは今回の全ルート中一番傾斜の強い核心部となる（一番強い使で70°強の氷）。7月28日、C4（6,850m）設営と共に恵野木、福島が上部ルート工作隊としてC4に残る。2日間吹雪かれた30日、無理にC4迄登って貰い（予定は装備不足の為C2迄登るということであった）、「この調子で頂上へ一緒に行こうよ」という声に「シングルの靴で8,000mを登るか」と言っていた恵野木がこの吹雪の為に下ることになってしまった。……ここ迄一緒に頑張ってきたのに残念でならない。……本当に残念だ……。恵野木の代り

ガッシャブルム連峰概念図



にサポート要員だった今田が急拠アタックメンバーに入るようになった。8月1日ワンビパークの予定で第一次アタックを開始する。我々が馬の背と呼んでいた所を佐藤がトップで登り切り17時頃7,350m地点でビパークする。夜は風が強く風上にいた私は非常に寒い思いをした。翌日は何が何でも晴れてくれと祈りながら迎えた朝、意が通じたのか快晴の日和である。朝5時に出発し、頂上三角岩後下のプラートを東稜目指し、左から右へと交替でラッセルし、15:00にガッシャーブルムII峰の頂に我々はK2を目の前にして立っていた。

《1980年ベルニナ山岳会カラコルムガッシャーブルムII峰登山隊》

隊長：佐藤英雄（30）、副隊長：内田良平（44）、登はん隊長：渡辺良政（28）、隊員：日高俊彦（33）、恵野木康雄（30）、福島正明（29）
今田賢次（21）、鳥山逸子（26）

（文責：福島正明）



全世界のネットワーク

AFIA ホーム 保険会社

海外 山岳 保険

取扱代理店

郷インシュランス・コンサルタント

〔ホーム保険会社代理店〕

〒100 千代田区丸ノ内3-1-11

国際ビル8F

TEL. 03-281-2981

相談所

ホーム保険会社首都圏支店

〒100 千代田区丸ノ内3-1-1

国際ビル8F

TEL. 03-211-4401

担当：寄木康男

遠征学入門

XVIII

実践篇

タクティックスについて(1)

清水 澄

タクティックスとは遠征の目標とする山岳などの攻略方法のことで、最近では戦略とか戦術という言葉でも表わされる。言うまでもなく実戦中の最重要部分である。この中には登山方法の技術的な面は勿論のこと、ローテーション、高所順応、気象関係、シェルパ問題等々、沢山の事項が関与される。ここではヒマラヤ登山を例にとって考えて行きたい。念のために言うが遠征には登山以外の分野も沢山あるのであるが、筆者は手がけていないし、考え方のパターンとしては共通する部分が多いと思われるので、ご容赦いただきたい。

基本的戦術

まず何人の人間を何回にわたって頂上に立てるか。縦走をするのか、岩壁登はんなのか。オーソドックスな極地法によってルートとキャンプを延ばすのか、ラッシュ戦術を取り入れるのか。等々が戦術の基礎となる。これらは遠征のデザインと

も云うべき分野なので、事前に充分検討されている筈である。そこで具体的な戦術とは、これらに対する肉付けを指すのである。現地で実際に登山を展開する場合に最も重要なことは、ルートの延し方とその速度及びそれに対する荷上げの進展の具合である。ルートを何処に決定し、それに高度順応をどのように行いながら開拓をして行くか。また定められた登山期間の中で余裕をもって目的を達成するためには、ルート開拓に時間が掛り過ぎたのでは話にならない。そしてそのスピードにマッチして荷上げも追いついて行かなければ、物資不足によって登高が停滞してしまうか、登山そのものがピンチを招くことになりかねないのである。

従って、これらをどの様に行うかということが戦術、つまりタクティックスである訳である。戦術はそのチームなりリーダーなりの求める登山理念によって、形態が変わって来るのが当然といえる。どういう登り方をするかという過程は、最終的な目的の達成以上に大切にされなければならない。自分達の追求する理念、理想を捨てて登頂という目的だけを克ち取ってみた所で、それは「仏作って魂入れず」のたとえの如く形骸でしかあり得ない。

であるから逆に云えば、自分たちの志向する理念、理想を、どの様な形で戦術の中に表わして行くか、ということが最も大切なことなのである。

ルート決定の方法

戦術の中で、ルート決定の方法は、何処を攻めるかという部分であり、最初に重要な仕事である。

自分たちの登山技術をぶつける場所がルートなのであるから、その決定は非常に大切である。どの場所なら燃えることが出来るのか。理念に合うのか。大まかには山のどの面を登るのかということであり、主として雪面などの弱点を捨てて行くのか、それとも積極的に壁などに向って登るのかの決定をまず行なわなくてはならない。これはそのチームの登り方の精神的部分である。

その上で、凡そのルートは写真、資料、情報、或いは実際の偵察、試登などの結果を基に、遠征出発以前に日本国内に於いて決定される。それは頂上までキチンと引けないこともあるし、2～3

本该案が考えられることもある。不明確な部分は解決を現地まで持ち越されることになる。

現地では、現実にそのルートを眼前にして、或いは実際に登って行きながら、技術的に不可能な部分や自然的条件が危険きわまりない部分を回避する為、変更を加えるのである。また本国で不明確だった所や、どちらを取るか決定しかねていたものも、解決してルートを一本に引く訳である。ここであまり、小さな部分が解決されないからといってペースなどで悩むことはない。実際に登って行って、鼻をこすり合せてみると、意外に道が開けるものである。

ある程度開拓をして延したルートでも、その上部に予想していなかった危険が現われたり、技術的に突破出来なかったりした場合は 余儀なくルート変更をしなくてはならない。小さな変更は問題とはなるまいが、大きく変更しなくてはならない場合は、常に自分たちの理念に立ち返っての上で互いの意志を確認する作業が必要となる。

ルート決定で心すべきことは、自分たちの理念や登高意欲を押し進めるあまり、自然的条件としての危険を無視したり盲目となったりしてはならないことである。

ルート工作のこと

ヒマラヤのような急峻な山岳では、一般にフィックス・ロープをベタ張りする登り方が採られる。岩壁、雪壁、氷壁などで転落の危険から身を護り、更に登高のスピードを上げる目的である。特に高高度での酸素不足の状況下、思考能力や運動能力が低くなっている折では、フィックス・ロープは限りない安全性を約束してくれる。

フィックス・ロープは多く張るに越した事はない。転落の可能性のある所は勿論のこと、ペースから頂上まで張れば万全である。しかし現実にはそれは、不可能であるばかりでなく滑稽である。

ロープをフィックスすることのメリットは

- ①転落を防ぎ安全を増す
- ②荷上げその他での登高のスピードを増す。
- ③悪天時でもルートを迷わない
- ④心理的に全隊員の絆となる

デメリットは

- ①ルート開拓、工作等の伸延に手間どる
- ②ロープその他の分だけ荷上げ量を増す
- ③隊員を増し、資金を多く要す

そこで、これらと自分達の登はんの考え方(理念)を勘案しながら、どの程度の場所までフィックス・ロープを張るか決める訳である。ただここで考えなければならないことは、荷上げなどにシエルバ等を使用する場合は、登山の技術レベルを隊員よりもずっと下げて安全を計るべきことである。また有能な隊員といえども、低酸素下では正常な働きが出来なくなることも考えさせたい。極く一般的な登山隊では、転落の危険のある所には全部、フィックス・ロープを張ると考えた方が無難である。

ロープを張るだけでは解決されない急峻な壁には、ハシゴを架ける。橋はクレバスを渡るのに必要となる。ステップを刻む事は荷物を上げる上で有用である。またルート・フラッグは全ルートに必要なのだが、特にアイス・フォール帯や雪原には欲しい。前者は氷河の流下により地形の変化が激しい事、後者は霧や吹雪等によってルートを失い易い為である。

ルートへの工作物は、強い日射と雪の反射によって緩むので、毎日補修しなくてはならない。雪中、水中に打ち込んだ支点が熱により、効かなくなってしまうのは想像以上である。またクレバスが開いて橋が落ちたり、フィックス・ロープが切れてしまうこともあるので、これらの点検、処置も必要となる。つまりルートは四六時中痛み易いので、常に通行を絶やさずにし、手入れ整備を行っていないてはならないのである。

この様に登高ルートを、国内の登山とは比べ物にならない程に工作をし、安全を高め、それを維持して行くのである。これはヒマラヤのスケールがものすごく大きく、登高距離が長くなることと、高々所での登山であることに起因する。つまり、

- ①荷上げ、工作の為、長期間通行する
- ②低酸素下、能力が低下しても通行出来る
- ③多数になる延通行人員を安全に早く通す

等の条件に耐えられる「道路」を作らなければならない為である。ルート工作にはこのことをしっかりと頭に刻み込んでおきたい。



ルグウメンドック、紅色
マメ科、オヤマノエンドウ属

花を求めて(4)

水野 勉

揚子江からイラワジ川へと旅行した最初の英国人はオーガスタス・レイモンド・マーガリであった。かれは1867年に、25才で中国へ渡った。かれはすぐに中国語を覚え、1870年には台湾に領事として赴任した。ここで植物学に興味を抱くようになったが、台湾にはあまり長く滞在しなかったのも、それほど蒐集をすることができなかった。それから、次から次へと赴任地が変わったが、1874年8月に突然パーモに行くように命ぜられた。直ちに、しかも秘かにであり、そこでブラウン大佐の一行を待つようにとのことであった。それは長い、危険な旅であった。

不運と病気がずっとかれにつきまとった。かれがたどったルートは、後になって揚子江から雲南府へ通ずる公道となったものであった。すなわち漢口から洞庭湖を渡り、沅河をさかのぼり、貴陽経由で雲南府というルートである。それから、大理府、騰越と進み、パーモへと抜けるのである。かれは1,000マイルにも及ぶこの見知らぬ土地での旅行を終え、目的地に着いたが、この旅行中ずっと病人の状態であった。リューマチ、歯痛、肋膜炎などであった。それにまた、さびしさとホームシックとが加わった。

ブラウン使節の一行に出合った後、かれはその先導をつとめ、一足先に進んで一行のとおりやすいようにはかった。しかし、パーモの東、約45マイルにあるマンヴィンで殺害された。

マーガリ殺害さるの報は、ラングーン経由で北京に伝えられた。その事件現場の状況を調査するべく調査団が派遣された。この調査団の中心は、エドワード・コルボーン・ベイバーがいた。その当時は領事館付通訳であったが、のちに重慶領事

になり、西部中国におけるもっとも重要な人物の一人になった。この時期に、ベイバーは二つの重要な旅行をした。一つは有名な峨眉山へ行き、それから南東へ向ってロロ王国をとったもの、もう一つはチベットへの公道上にある打箭炉への旅行であった。

不運なことに、ベイバーは植物に興味を持たなかったように思える。かれが明らかにしたのは、注意さえ十分に払えば、西部中国の間道も比較的 safely 旅行が出来るということであった。

それから1、2年おくれて、中国インランド・ミッションのマッカーシ神父が揚子江からビルマまで、貴州、雲南府経由で旅行した。かれは途上数種の植物を採集し、シダ類の二つの新種がかれの名にちなんで名付けられた。

すぐれた旅行者、ウィリヤム・ジョン・ギルは植物学にかなり興味を持っていた。かれは生れながらの彷徨者であった。9年の間に、ペルシャ、トランスカスピアン・ロシア、雲南、東チベット、アフガニスタン、チュニスと歩き廻り、最後に、英国政府のために、シナイ半島で調査に従事しているときベドウィン族によって殺害された。

かれの中国旅行は、他の多くの人々と同じように、重慶から出発した。そこから、成都へ行き、更に北部四川の高山地域へと入っていった。成都へいったん戻って、W・メスニと共に、大旅行に出発した。チベット辺境をとおって、打箭炉、理化、巴塘、阿敦子へという旅である。これらの地名は、後になって出てくる植物採集者のルートをたどると、たびたびお目にかかる地名である。阿敦子から、かれらは南西に向い大理府へ出て、それから騰越経由でパーモへ抜けた。

成都からバーモまでのこの旅行は、7月10日から11月1日(1877年)までかかり、1,100マイルを踏破した。停滞日を考えても1日平均10マイル以上のペースである。未踏の地域をたどった、この旅行がかようにスピーディに、かようにスムーズになされたのには、同行者メスニの力によるところが大きかった。かれは1860年戦争終結以来、中国政府に勤務しており、のちに中国軍の少将にまで昇進した。かれのこの国及びそのコトバに関する知識は比敵するものがなかった。

ギルはこの旅行で数種の植物を採集したが、このような旅行の性格上、採集はスピードの犠牲にならざるを得なかった。植物学的是まづらわされずに、かれは自然環境をよく観察し、その紀行、The River of Golden Sandの中には、次のような文章がたびたび見られる。

「山々の頂きは暗いモミの森におおわれ、東西にのびる谷は、松におおわれた高地がひろがっていた。河床はかなり幅広く、廻りの傾斜地には多くの種類のかん木が生い茂っていた。そのかん木の間には野生の花々が豊富にみられた。ある場所には野生のバラがいちめんに花盛りで、その近くの大気は文字どおり甘い香りでみちみちていた。北斜面には、若々しい緑のチャーミングな、背の低い樹々が茂っていた。そして、バーベリ(へびのぼらず)の黄色の花がどこにもいちめんに咲きこめ、中国の風景を特色づける色彩にあたたかさを加えているように思えた」

残念なことに、ギルは中国に長く滞まっていなかった。中国に対するかれの愛情と知識があり、もし、かれの生涯にわたってつきまとったように思える、スピード旅行に対する情念を抑制しさえしたならば、かれはすぐれた採集者となり得たであろう。

メスニもまた同じように、熱心な、スピード旅行者であった。バーモに着き、英国で休暇の一年間をすごした後、かれは1879年広東に渡り、それからの四年間というもの、中国をあちこちといそがしく歩き廻り、北西部は広通から甘肅まで(ファーラーのOn the Eaves of the Worldの地域を訪れ、蘭州、西寧、青海までも行った)、四川省から北京までも踏破した。ハンスは例の如くかれ

に連絡をとり、メスニはハンスに多くの種類を送った。しかし、すぐれた採集者になるには、メスニはあまりにも早い行動を好みすぎたのだった。

中国の税関や英国の領事館などの職員が次々と増加していくにしたがって、ハンスは自分の植物採集の仕事に喜んで協力してくれる人々をますます増やしていった。やがて、ハンスは西部中国の植物に関して、殆んど信じられぬくらい豊富な蒐集を実現したのであった。西部方面で何か行動をしようとする人のことを聞くと、ハンスはすぐに自分のために植物採集をしてくれるように依頼した。不運なことに、かれは生物学者であって、庭園のことは考えなかった。それで英国へ新種を紹介しようという努力は全くしなかったし、自分の協力者にも植物標本の材料以外のものを採集してくれとは依頼しなかった。その結果、多くの美しい花々が発見されたけれども、その紹介はずっと後まで遅れてしまうこともあった。

たとえば、ヴァイパーナム属の一植物は1879年に発見されたけれども、1901年になってはじめて、E.H.ウィルソンによって紹介されたのだった。また、トーマス・ウォッターズはサクラソウの一種(*Primula obconica*)を発見したが、それは数ヶ月後、チャールス・マリーズによって紹介された。また、ハンスの協力者ウォッターズは、*Primula sinensis*を発見したが、1895年まで紹介されなかった。また、別の協力者W.R.チャールズは可愛らしい*Viburnum Carlesii*を1883年頃朝鮮で発見したが、1902年になって、しかも日本からキューに送られてきたのである。キューというのは、御存知の方も多いと思うが、英国の有名な植物園で、その園長を「ヒマラヤン・ジャーナルズ」で有名な、J.D.フーカーが勤めた。このジョセフの父親であるW.J.フーカーも初代の園長として1841年から1865年まで勤めた。息子のジョセフは父の跡をついで、園長になり、1885年まで勤めた。キュー植物園はロンドンにあって王立であった。

1902年に日本からキュー植物園へ送られた花について、どんな花だったか筆者にはわからないが、この当時、すでにフーカーはキューを退職していたから、フーカーはあずかり知らぬことであった。

連載

ネパールヒマラヤ

トレッキング許可で登れる

山

6189m

アイランドピーク



東北の田舎でヒマラヤの頂への夢を実現しようとしていた私達に、ネパール政府の発表したトレッキングで登山可能な18座の解禁は非常なビッグニュースであった。標高は低いが私達には手ごたえ充分な峰々で従来の遠征の様な複雑な手続等を必要としないメリットの多い許可条件が魅力であった。早速調査検討し目標の山をクーンブ山群のアイランドピーク(6,189m)に決定し、在ネのランジャ氏やHAJ諸先輩の御指導宜しきを得て'78年7月に許可証を取得する事ができた。言うまでもなくクーンブ山群は別名エベレスト山群と呼ばれ、ヒマラヤを代表するジャイアントが集中する山域で、エベレスト、ローツェ、チョーオユー、マカール等の8,000 m峰が連なり、またシェルバの故郷のナムチェバザールのある所でも有名だ。目標としたアイランドピークは、そのローツ

岳人長井ヒマラヤ登山隊

ェの南側に小さく氷壁で覆われた独立峰である。'78年12月15日成田発、'79年1月4日待望の頂上に立ち約1ヶ月の登山活動の後、無事帰国出来た。

計画と山選び

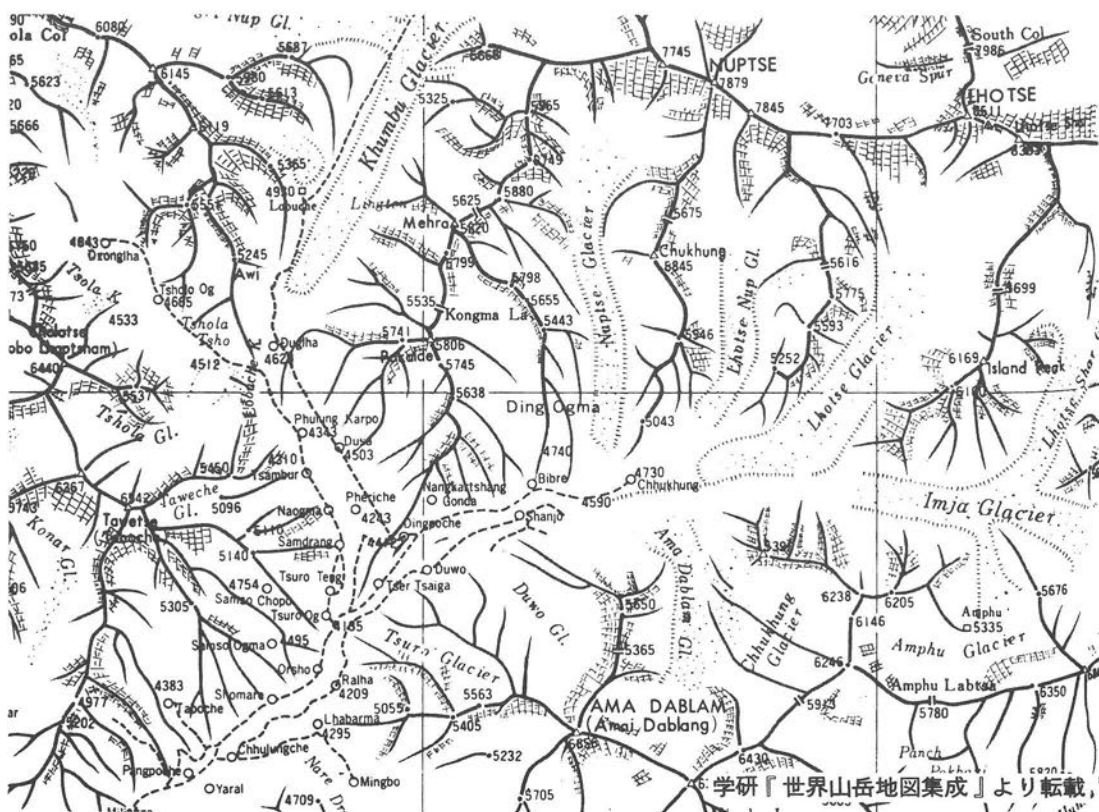
私たちは'78年4月、数年にわたり計画し実行に移されていた別のヒマラヤ遠征計画から退いた過去がある。理由はやはり地方の組織には大きすぎる計画への取組む姿勢の問題であった。既に1~2回の偵察でネパールを経験した者が中心になり、新たな計画を数年内に実現しようとしていた。丁度折りも折り18座の解禁が発表になったわけで絶好の山行きが実現出来ると喜んだ。いち早く登山規則申請様式等をHAJより送付いただいた。何んと言っても観光ビザで登れる為遠征費が安く、

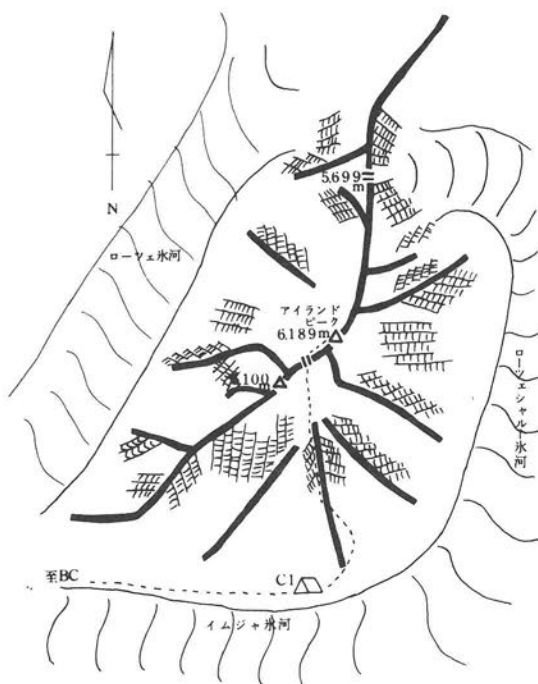
同行医師、リェゾンの必要もない。また約1ヶ月間で登頂可能な事など、今までの許可条件とは各段の差である。しかしながら許可証交付が一シーズン隊式なのか、競合の場合どうするのか不明なため不安と焦りが先にたった。山の選定に当たっては、諸先輩より寄せていただいた貴重な資料情報を分析し、3つ程の条件を上げ、目標の山をしぼった。第1に社会人として最も大切な休暇の事で技術的な面も考慮に入れ、1ヶ月間で登頂可能な山である事、第2に8,000 m峰がより多く望める事、第3に遠征費が安価な事等である。3つの条件を満たす様な山はなかったが、山域としてやはりクーンブ山群方面とし、第1候補にアイランドピーク(6,189m)、次にバルチャモ(6,282m)、クワンデ(6,091m)、それにメラピーク(6,431m)と続いた。慎重に検討した結果アイランドの名の通り独立峰でまたキャラバンの途中も充分楽しめる同峰に決定したわけだ。隊員は3名と少ないが、急であったことや前記の諸々の問題の為に強いて呼びかけもしなかった結果である。飯沢 実(28才)、那須宗一(26才)共にタフで心強い同

行者であり、発足間もない岳人長井の中堅でもある。

登山活動

年末年始の混雑をさけ12月15日日本を後にしたが、結構カトマンズにはにぎわっており、特にルクラ行きの飛行機には座席がとれず悩まされた。しかしランジャ氏の努力もあって5日遅れた25日にルクラに着陸し、トレッキングのルートいわゆるエベレスト街道をバブディンマ、ナムチェバザール、タンポチェ、パンボチェ、ディンボチェとたどりチュクンにBCを予定通り建設した。ここからC1(5,100)を出し一気に頂上をねらうタクティクスを採用する事に日本で計画がなされていた。ルクラ(2,750)からBC(4,730)に着いてサードーに「サブノアタマイタクナイカ。」と聞かれる迄頭痛がなかった。「5日間で2,000 mの標高を上げたのだからなあ」と3人共顔を見合せた。チュクンからのローツェ南壁は空を覆うかのように圧倒的な山容を誇っている。BCからC1へはイムジャ氷河を登りローツェシヤール氷河に入った所にルートを求める事にした。C1(5,100m)





はその登り口の下に設置した。登頂予定日を1月4日と定め、上部の偵察を行なうなど万全を期した。

頂上へ

’79年1月4日氷点下20℃、睡眠不足ながらシュラフを出る。時、午前3時40分、いよいよアタックの日だ。／＼はるか日本では御用始めの日である。午前5時突き刺す様な寒気の中隊員2名シェルパ2名はヘッドランプを頼りにC1を後にする。昨日の偵察ルートを登ると、薄明りの眼下にイムジャ氷河が不気味に横たわる。沢沿いの直登を続けるとようやく昨日確認したブルーアイス（氷河）の舌端がルンゼ上部にたちはだかる。軟岩帯をフリーで通過後ようやく尾根に着くと朝日に光るクラスト帯の始まりでアイゼンを装着する。5,700mしかし20歩程の前進で呼吸を整えないと思うように足が出ない。酸素の量が平地の半分位だから仕方がないが、高所で育ったシェルパとは格段の差が出る。両側に切れ落ちたヤセ尾根を通過すると大雪田帯に入る。始めてアイランドピークの頂上全容が見える。大雪田の上部奥にヒマラヤヒダが走る主峰、大きくコルにそそり立つ雪壁、それが紺碧の空に展開しようやく現実の形と

して「登頂」が意識できるようになった。大雪田帯には、大きく口を開けたクレバス、恐ろしい雪に隠れたヒドンクレバスが多い。それを縫うように2人を結んだザイルが左右に走る。落下の緊張感が押しよせてくる。ようやく通過。午前10時、コルへ突き上げる150°の雪壁が行く手にせり出す。セラック氷片が光る中40mザイルぎりぎり伸ばし、4ピッチで登りあげる。アイゼンの小気味良くきく壁だ。6,050mのコルは風もなくはるか眼下にBCのチュクン、そこに流れ込む大氷河、眼前に迫るローツェの大南壁と大パノラマが展開する。同時に忘れかけていた極度の倦怠感が重苦しく撃ってくる。

コルから頂上に向け東面に雪庇が走る単調な尾根に再び20歩程の遅々とした前進が続く……。何回か繰り返した後、更に踏み出そうとした時、「サミット、／＼」とザンブサダーが叫べ、丸い雪に覆われた頂上直下に笑顔でザンブーが迎えてくれた。もうザイルは伸びない。これで終わった。／＼ただそれだけの大きな安堵感が徐々に満ちてくる。

しかし思っていた感激らしきものもない登頂だ。そこまで余裕のなかったせいかもしれない。ともかくネパール国旗、日の丸、会旗はついにその頂上で振られた。’79年1月4日午前11時28分、アイランドピーク（6,189m）の頂上である。20分の滞在の後下山を開始する。頂上に立った頃より吹きつけた風が急に勢いを増して来た。その風は雪片をも巻き上げ、確保を続けるザイルを弓なりに空に吹き上げ、一瞬にして辺りを変貌させる。だが幸いにも風はコルを通過する頃より弱まった。登る時費した事など嘘の様に一気に雪壁を懸垂で通過し、雪田のクレバス帯も無事渡り終えた頃、後を振り向くのもつらい疲労感がどっと出て来た。高度差約1,100mを10時間で登り下った。午後3時ガスの濃くなったC1に帰幕した。

（文責：植松秀之）

事務局日誌 (9月)

- 2(火)中国登山友好代表団歓迎会(山森出席)
- 4(木)日山協主催、中国登山懇談会(山森出席)
登山学校先発隊出発(尾形、北出)
- 8(月)M・S・コーリー氏来日歓迎会(稲田出席)
- 11(木)ヒマラヤ107号発行
- 13(土)登山学校本隊出発(山田他16名)
カンチェンジュンガ委員会(於ルーム・15日まで)
- 16(火)ヒマラヤ会議(福岡・高知会場)案内状発送
- 18(木)リック・リッジウェイ、シュイナード両氏
歓迎会(山森、菊地、藤倉出席)
- 26(金)東京定例集会(於ルーム・講師 杉本会員)
- 27(土)日山協主催・第一回海外遭難対策研修会
(山森、八木原出席)

一寸感

★角田不二編集長は春のカンチェンジュンガ偵察から帰国し再び登山学校のピンチヒッターとしてインドへ向った。'78年には亡き登はん隊長の後を引き受け隊長の補佐役を努めた。今頃はケダルナートの真白き肌の中で思う存分の活躍をしていることだろう。そして彼は来春再びカンチ縦走に向かい、ポストには所属山岳会でのガンガプルナ峰の登はん隊長として仲間を率いるという。若き勇者に幸あれ!と祈るのみ。編集の代打として感じたこと—HAJは人材不足だ!—(KUMA)

ヒマラヤNo.108 (11月号)

昭和55年10月10日印刷 55年11月1日発行
 発行人 柴田 金之助
 編集人 角田 不二
 発行所 日本ヒマラヤ協会
 〒160 東京都新宿区高田馬場 3-23-1
 淀橋食糧ビル 506号

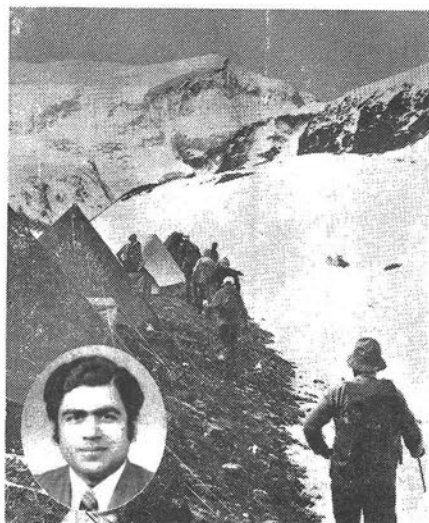
郵便振替 東京 0-48954「日本ヒマラヤ協会」

Shikhar Travels

—— シカル・トラベル ——

“魅惑の インド・ヒマラヤ”

シッキム・ブータン・ガールワール・クマオン
 クル・マナリ・ラダック・ネパール……
 へのトレッキングや登山を計画されている日本の皆さん!
 当、シカル・トラベルは、通関・隊荷輸送からガイド、
 ポーター、ポニーのアレンジなどすべてのご用命を承ります。



CAPT SWADESH KUMAR
(MANAGING DIRECTOR)

Shikhar

TRAVELS PRIVATE LIMITED

1,701, Nirmal towers,

26 barakhamba road new delhi-110001

tel. 42555, 42666 telex 031-4364 SHIK IN Cable SHIKHE

Branch office: Gangtok

Camp office: Joshimath & Uttarkashi



学研の山岳地図集成シリーズ

田淵行男 日本アルプスの蝶

美しき氷河期の後裔「高山蝶」を克明に記録した写真集

●山と蝶をライフワークとする山岳写真家田淵行男が三十余年の歳月と情熱を傾けて完成した待望の写真集。

●造本・体裁
A4変型判 ●綴頁466頁(カラー1216頁・モノクロ136頁、解説104頁) ●収録写真カラー約400点モノクロ約200点
■定価 25,000円

主要山岳の全貌がつかめます 山岳関係者のための基本図書

第①集

北海道→中部山岳(北部)編

●B4判・全202P(収録地図54図・解説図99P)

北海道／羅臼岳・斜里岳・阿寒他11図

東北／八甲田山・岩木山・八幡平他13図

北関・上信越／那須山群・守門他13図

中部山岳(北部)／黒部・白馬連山他5図

第②集

中部山岳(南部)→九州編

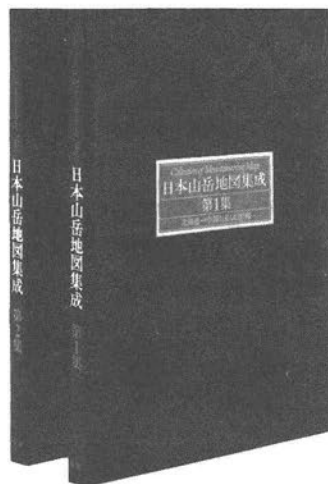
●B4判・全190P(収録地図40図・解説図78P)

南関・甲信／両神山・雲取山他9図

中部山岳(南部)／鳳凰山・筑ヶ岳他7図

北陸／3図 紀伊／3図 中国／2図

四国／2図 九州／8図



学研版 日本山岳地図集成 全2集

■吉沢一郎他編／縮尺1:50,000 全2集セット 現金価格(定価)28,000円(分額払もあります)

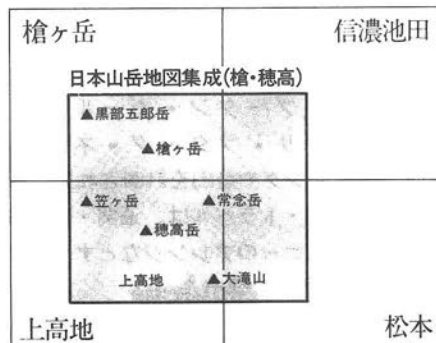
地形図

- 国土地理院1:50,000地形図 200面に含まれる1,500m以上の山岳を、1:50,000で収載。
- 登山コース、山小屋、キャンプ地等を詳細に記載。

解説・図説

- 概念図、行程図、主要ルート明細図、宿泊、交通、人文、動・植物、参考文献等を解説・図説。
- 登山、自然研究、開発関係等の資料に好適。

地形図4面必要とする山岳を1面で説明。



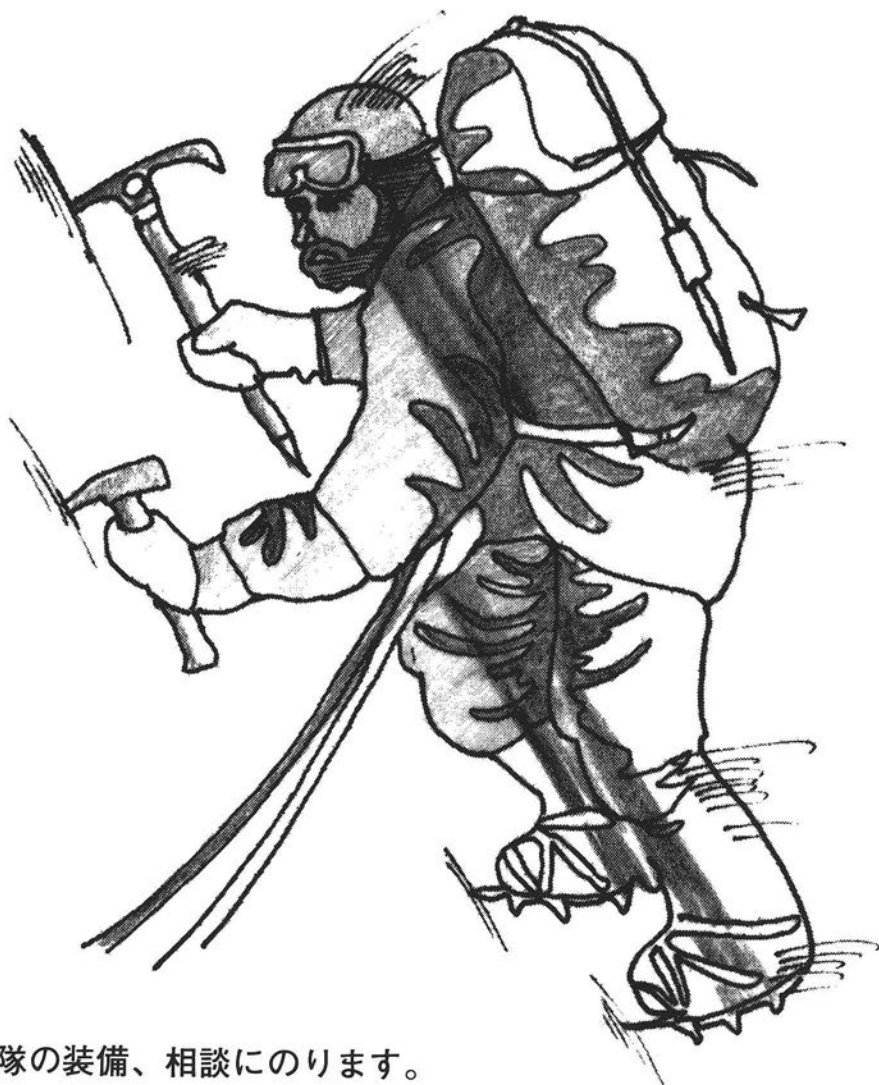
学研 学習研究社

●内容見本ご希望の方は下記宛て請求ください。

(株)学研美術販売

〒145 東京都大田区上池台4-40 5 ☎東京(03)720-1111(代)

ヒマラヤへの装備



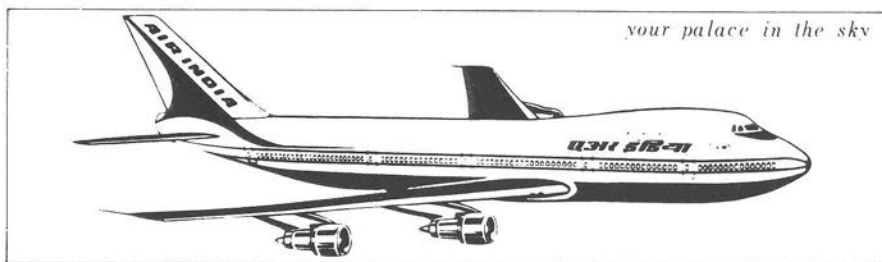
◎遠征隊の装備、相談にのります。



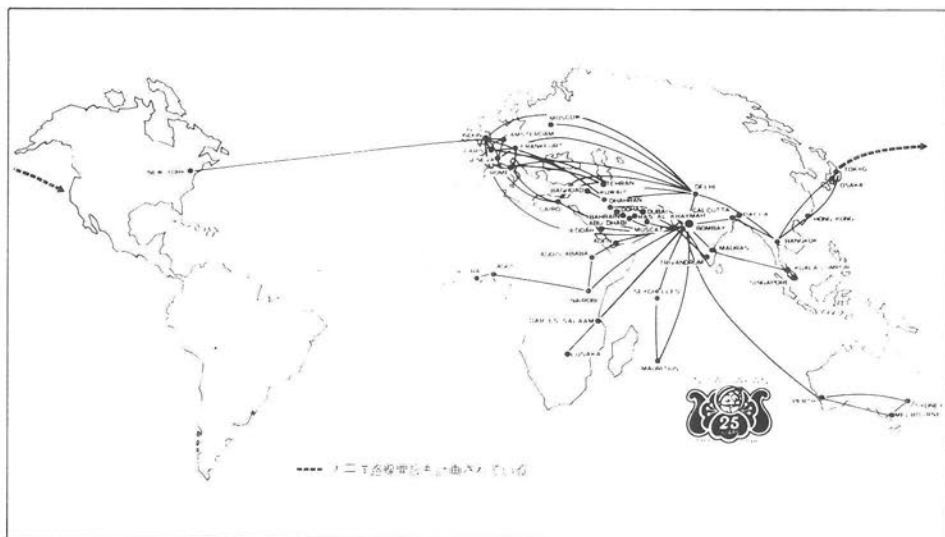
ICI 石井スポーツ



- 新宿登山本店 / 〒160東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03 (208) 6601(代)
- 新宿西口店 / 〒160東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03 (346) 0301
- 水道橋ハードギアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町2-8-14 ☎03 (264) 5575
- 水道橋ソフトウェアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町2-8-6 ☎03 (264) 8901
- 大宮店 / 〒330埼玉県大宮市宮町2-123 ☎0486 (41) 5707
- 高崎店 / 〒370群馬県高崎市新町105 ☎0273 (27) 2397
- ICI通販部 / 〒160東京都新宿区大久保2-19-10東和ビル内 ☎03 (200) 7219



AIR-INDIA ROUTE MAP



ヒマラヤとアルプスへの登山は、名古屋の稗井(HAJ会員)まで、お問い合わせ下さい。

名古屋●中村区名駅四丁目7-35ホテルニューナゴヤ 747号室 〒450☎(052) 583-0747

世界の43都市をネットする
エア・インディア

東京●千代田区有楽町日比谷パークビル	〒100☎(03) 214-7631
横浜●中区常盤1-2関内日本ビル	〒231☎(045) 651-2874
大阪●東区備後町松豊ビル	〒541☎(06) 264-1781
神戸●葺合区布引2-1-3新布引ビル	〒651☎(078) 222-1919
福岡●博多区博多駅前1-3-21八重州ビル	〒812☎(092) 471-7172